

ドイツの 1968 年

1. 野ばらとローレライ

去る 6 月 16 日に、娘とその夫 (ドイツ人) を囲んで、親戚のパーティを行った。律子の兄夫婦・妹夫婦、そしてわれわれ夫婦と次男、総勢 9 名が中華料理店の個室で一晩を過ごした。婿殿は日本語を知らないし、女性陣はまったくドイツ語を学んだことがない (男性陣は一応大学の教養課程で第 2 外国語としてドイツ語を学んでいる)。しかし、女性陣の方が「私ドイツ語を知ってるよ」と意気軒高であった。「ドイツの言葉はね、下腹に力を入れて、イッヒフンバルト・ウン・デル・ダス・デン、というんだよ」と笑いこけている。

一通り飲食を終えてから、わたしがプリントして持参した歌詞集を配布した。「野ばら」と「ローレライ」である (1 番の歌詞だけを写しておこう)。

**Heidenröslein** ハイデンレスライン (歌詞)

Worte : Johann Wolfgang von Goethe

Sah ein Knab' ein Röslein stehn.  
Röslein auf der Heiden,  
war so jung und morgenschön,  
lief er schnell, es nah zu sehn,  
sah's mit vielen Freuden,  
Röslein, Röslein, Röslein rot.  
Röslein auf der Heiden.

野なかの薔薇	譯	近藤朔風
童は見たり		
野なかの薔薇		
清らに咲ける		
その色愛でつ		
飽かずながむ		
紅にほふ		
野なかの薔薇		

Friedrich Philipp Silcher 1789~1860

“Die Lorelei”

**Heinrich Heine**, 1797-1856 ハインリッヒ・ハイネ 作詞

Ich weiß nicht, was soll es bedeuten,  
Daß ich so traurig bin;  
Ein Märchen aus alten Zeiten,  
Das kommt mir nicht aus dem Sinn.  
Die Luft ist kühl und es dunkelt,  
Und ruhig fließt der Rhein;  
Der Gipfel des Berges funkelt  
Im Abend sonnen schein.

なじかは知らねど
心わびて
昔の伝説 (つたえ) は
そぞろ身に沁 (し) む
寥 (さび) しく暮れゆく
ラインの流 (ながれ)
入日に山々
あかく映 (は) ゆる

ところが、歌詞を見ながら 50 年前を思い出してドイツ語で歌っている日本人男性軍に対し、婿殿は神妙に紙の上の歌詞をフォローしている。言い訳するには、「ドイツでは 1968 年に学生たちの反乱があったでしょう。その時古い権威主義を脱ぎ捨てようという社会思潮が支配し、先生たちも古典を無反省に押し付けるのはやめてしまったのです。これらの歌は、聞いたことはあるけれども歌うことはできません。日本の方がすごいですね」。その時、彼は生まれて間もない年齢だったから、無理からぬことかもしれない。

## 2. 学生の反乱から緑の党へ

1968 年の学生の反乱以降、ドイツの若者たちは社会変革をめざす大人たちに変身していった。従来大国主義からより生活に密着した民主主義をめざして、社会民主党や新しい緑の党の活動家となって政策決定システムの中に活動の場を求めていった。彼らの住む社会や都市は、境界が明瞭な島型のコミュニティが散在しており、その単位自治体の集積が州を形成し、さらに国を構成している。ドイツの自治体の市役所の半数は上下水道局や清掃局を運営すると同様に電力局を持って自前で運用している。それで、生活のインフラを市の行政府と市議会という市民代表が決定することができる。

そんな中で、彼ら自身の生活空間を身近に改善する方法として脱原発に向かったことは、自然であつただろうと推測される。原発が東京と福島の間ほどに離れているのではなく、小高い丘やビルの上から見える距離にあるし、その電力を選ぶか、別の発電システムを採用するかを市会議員選挙の気軽さで選択できる。原子力発電所はそれぞれの町から 20km と離れていないところに立地している。私自身の見聞を申せば、ライン中流のコブレンツ市の丘の上から見える位置、鉄道駅で 3 つ目あたりにミュルハイム・ケアリッヒ原発があつた<sup>1</sup>。

戦前の国家主義や冷戦構造から近隣諸国との融和を推進して EU を実現したのも、新しい政治思想の基盤があつてのことに違いない。

しかし、思想の転換が社会の変革をもたらした背景には、そもそも一人ひとりの市民が自ら思想形成しており、その上で思想・考え方を更新していったというプロセスがなければならない。ドイツの人たちが頑固に自分の思想にこだわることを見せつけた一例は昨年 9 月の総選挙であつた。選挙後、メルケル首相が率いるキリスト教民主・社会同盟 (CDU/CSU) が第 1 党の座を守ったものの、過半数を得られず、第 2 党のドイツ社会民主党 (SPD) と連立交渉に入った。各政党はマニフェストを掲げて選挙戦を戦う。連立協議は、そのマニフェストの上で政策が異なる項目を一つ一つ俎上に載せて、改めて

---

<sup>1</sup> 「三度目のドイツ旅行」『筒井新聞』第 274 号

<https://sites.google.com/site/tsutsuishinbun/2014/274/sandome-no-doitsu-ryokou>

どういふ政策で妥協するかを交渉することになる。各党代表によるマニフェストの合意ができると、代表は各党へ持ち帰って党員投票にかけて賛成多数であることを確認しなければならない。今回の交渉は5カ月間を費やして、CDU/CSU と SPD の連立が成立した。

これを日本の政党選挙と比べてみよう。自由民主党と公明党が表立って明快なマニフェスト協議をしたという報道に接した覚えがない。むしろ、安倍首相率いる自民党は、もっとも重要な政策としている「憲法改正」を選挙戦中は口にしないようにして、選挙に勝利した後には前面に打ち出してきた。公明党は「憲法改正」に反対らしいと、ときどき新聞が書いているけれども、山口党首が明快に公衆の前で賛否を表明したというニュースは見聞きした覚えはない。野党側もしばしば曖昧である。昨年10月の総選挙で民進党の前原代表が小池東京都知事率いる希望の党との連携を密室で決めて、一夜にして選挙協力を行うことにしたが、政策協議などが行われたのかどうかも分からない。一つの重要な政策上の争点であった「脱原発」を巡って、その後立憲民主党が設立されたことによって旗幟が鮮明になったが、それ以前は連合を中心とする原発推進派と市民運動を母体とする脱原発派の曖昧な呉越同舟が続いていた。これは、安倍自民党とそれに付随する高級官僚たちの無節操に辟易する市民たちにはフラストレーションがたまる、貧しい政治地図であった。

現在の議員たちや高級官僚たちの無思想・無節操は、選挙民一人ひとりの無思想・無節操の反映だと考えなければならない。

(2018年6月19日 哲)